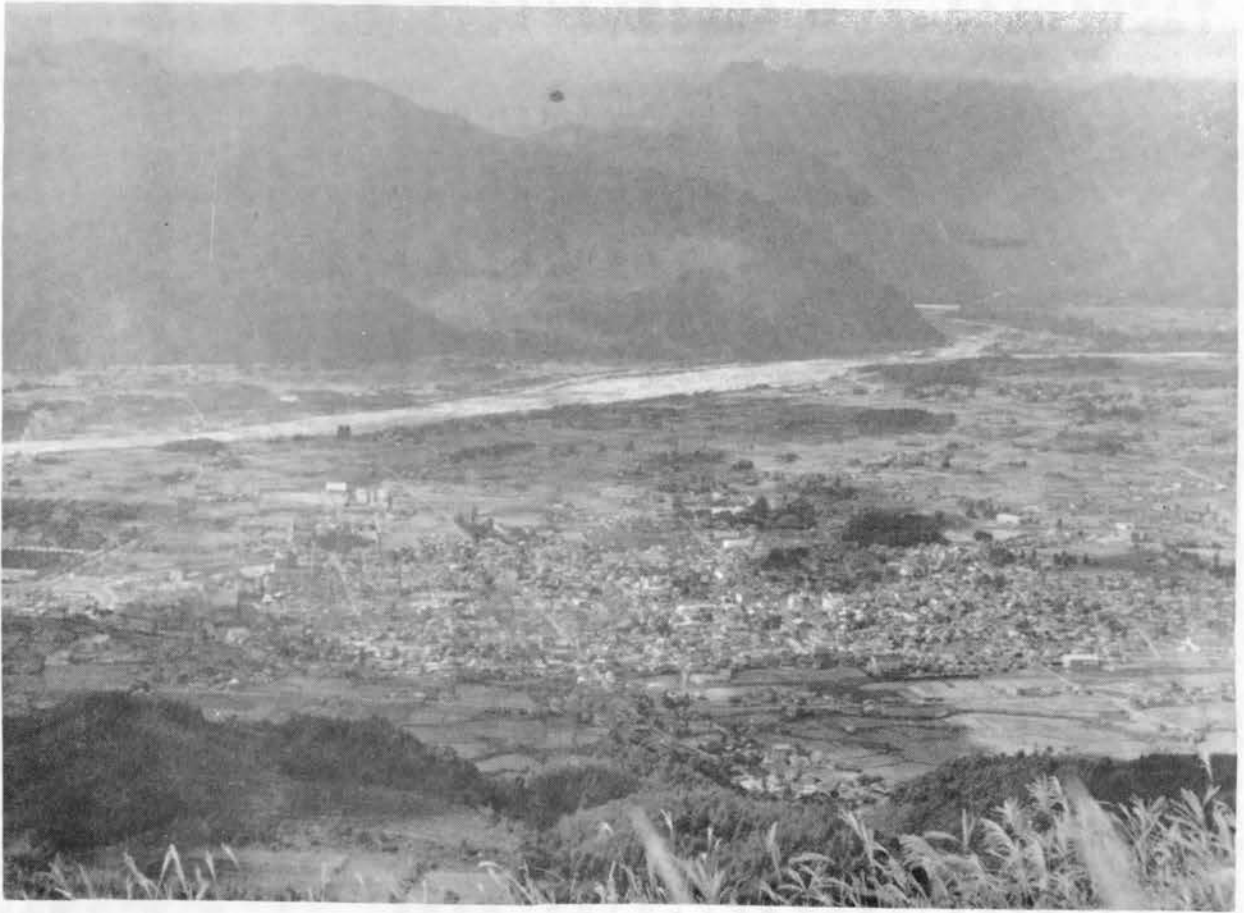


# 山と博物館

第16巻 第9号 1971年9月25日

大町山岳博物館



大町と高瀬川

撮影 海川庄一

## 自然破壊は犯罪である

川崎隆章

「自然破壊は文明破壊であり、人間破壊であり犯罪である。人間が生きていくためには自然破壊もやむをえないというのは誤りである。」物質文明の破たんは文明であり、豊かな自然の中に新しい文明の創造がなければならない。」

朝日新聞の「声」欄に茨城県の小松三郎という人が「自然破壊する現代三ばか」と題する文章を投書しており、その中にこんなくだりのあるのが目にとまった。

現代はケーブルカー、スカイライン、観光道路等の施設が、小さい日本の至る所にはりめぐらされ、天に向かってつばすごとく、そのはねかえりはとり返しのつかない自然破壊と共に、利用者殊に次代の若人の人的低下をもたらし、祖国のため後代のため、一つとしてよい結果をもたらしていない。

いま大町で問題となっている東京電力による新高瀬川開発に関しては、これまでの自然破壊と異なる公益のダム建設であって、これまでも黒部、有峰、安曇などのダム化があったが、いよいよアルプスのふところに入りこんできた感じを深くする。日進月歩の電力需要の問題の前には、我々は施設者の良識を信頼し、この工事を是認し、見守らねばならないのであろうか。

だが、収益を目的とする厚かましい諸施設については、これを機に一切停止し、旧に復する努力を国として実施すべきだ。これら施設者は自然美を守る考えは全くない。とりやめになった尾瀬が原貯水池とか槍ヶ岳ケーブルカー、富士山頂トンネル工事など、実現すれば外国の笑い物だが、今問題の尾瀬の車道にしても、最初は車道は三平峠より尾瀬沼長茂前に至り大江川湿原を通過して沼山峠に通じるというバカバカしいものだった。

これらのぶざまな計画は施政者の責任である。アメリカの「原始地域保護法」を思うと顔から火の出るような恥かしい思いである。

(日本登山学校校長)

# 私の意見

## 東京電力の高瀬川再開発に寄せる

— 1 —

大自然の景観と水力発電工事が、たがいに反発しあつて共存できない現状を、大町市民は青木湖に黒部峡谷にみえた。発電工事が国家的な要請でおこなわれたかもしれないが結果的には例外なく自然が荒され、いたましい傷口を残したことに変わりはない。

自然保護が叫ばれて久しいが、それが住民運動になるまでに認識されたのはついさきのことである。黒部の場合でも、市民の生活条件に直接関係のある補償は尊重されたが国家的な至宝が(自然が)損傷をうけたことにたいする代償として、何を求むべきかという肝心な点がボカされてしまった。

だから、扇沢でも、ダムサイドでも、室堂でも、優先されたものは観光企業だけであり当時の大町市当局か、山岳博物館を中心に提唱した針ノ木自然園の開設という、ほんのわずかな良識さえも、ついに実を結ぶことができなかつたという悲しむべき経緯がある。

### 自然教育のセンターを

内山 慎三

国立公園のすぐれた自然景観を保護するために、厳しい規制が必要なのはいうまでもない。しかし、電源開発のような大規模な自然の破壊行為を規制できない現状では、事前に、せめて工事後の自然利用について慎重に考えておくべきであらう。残された工事事施設、例えば道路、土捨場、宿舎などを観光に供するのはよいが、黒部と同じ轍を踏んではなるまい。



岩盤の爆破作業が進む 不動の滝、付近

需要、丸つきり無駄な需要が含まれていくようにすらみえる資源とは有限なものだといふ認識を新らたにする必要があらう。道路問題でもそうだが需要はすべて満してやらねばならないものだろうか。

第二の問題は、変化のほけしい現代において百年を単位として考える建造物の築造は適当かどうかということである。急テンポで、あらゆる経済、社会、文化構造が変りつつある現在三十年で決定的な変化が起るといわれる。そんな現代百年を単位としたダム

自然保護の上でいちばん必要なのは、国立公園の教化施設が、金がない、儲からないためにできないという現実を、いかに克服するかを国も自治体もわれわれも考える時である。私はとりあえずそれを、自然損傷の国民にたいする代償として電力会社に要求すべきだと考える。

自然保護の思想は自然の理解によって培われる。高瀬の場合、何よりもまず自然保護のための基礎研究が現地でおこなわれるような施設が必要である。それは自然保護センターとも自然教育センターともいふべきものだが私は山岳博物館分館がよいと思う。

そこでは生態学的、分類学的な生物の研究や、地質、気象などの研究が多角的におこなわれる。このような現地での研究的雰囲気は

高瀬渓谷を訪れる観光者にも映じて、自然を大切にする精神を培うに役立つはずである。高瀬ダムによって水没する地域の学術調査がおこなわれつつあることは画期的なことだがこの渓谷の正しい自然利用の「しくみ」についても、観光事業に優先して早急に検討されることを望みたい。

(大町の自然を守る会会長)

### 水力発電と自然保護

品田 稔

最近クレーラーをはじめとした電力需要の増大と公害反対運動の盛り上がりから電力需給の見透しが悪化し、きれいな電力として水力発電特にピーク時発電が再び着目され従来と異質な自然保護上の問題が生じてきた。

これに対し、自然保護の世論も強まり、対立は益々先鋭化してきたといえる。そこで問題の原点にたしかえつて一度考え直してみた。まず、第一の問題は、電力需要とは何かということである。この中にはまぼろしの需要が含まれてはいないだろうか。レウでもよい需要、むしろない方がよい需要、丸つきり無駄な需要が含まれていくようにすらみえる資源とは有限なものだといふ認識を新らたにする必要があらう。道路問題でもそうだが需要はすべて満してやらねばならないものだろうか。

などは全く無用の長物、いや危険な代物になるという可能性は意外に高いのではあるまいか。

第三の問題として新たな原子の熱核融合の開発を早急にする必要があるのではあるまいか、これは問題というより根本的な期待である。

第四の問題は、火力、原子力の立地難、電力需給見透しの悪化、水力発電の再認識という公式は問題を正しく扱えているであらうかということである。何故そうなったかをもう一度考え直す必要はあるまいか。

第五の問題は、水力発電、特に揚水式発電は果して水利用として問題はないであらうか。広島県の三段峡では、いわゆる水が死んで悪臭を放ち問題になったという。自然というのは思いがけない結果を生むことが多い。充分な研究なくしては目的そのものすら達せられないことが多い。心すべきであらう。

(東京の自然史研究会)

### 自然の反作用

海川 庄一

大雨が降って、それが河川に集って来て河川を氾濫させることにより水害が起る。これは全くの自然災害のようであるが、実は多分に人の力が影響している。

天竜川の泰阜ダムは建設後五年で、貯水池の80%が土砂で埋り、上流の河床が上昇して兩岸の村は大雨の度に水害に見舞われている。発電と治水のための多目的ダムも、自然の反撃をそらすことはできなかった。

河川のコントロールは思わぬ反動をまねくものである。これはしかし、人間が利水や治水のために、自然に加えた力の反作用であり自然の原理にかなかつたことである。科学がその原理を見抜けなかつた場合や、科学が社会的な力に封殺された時に自然の反撃がやって来る。

高瀬ダムも完成後五十年とたたないうちに堆砂に埋って、発電ダムとしての機能を失うであろうが、その前にダムの上流や下流ではさまざまな変化が起ることが考えられる。道路建設などに伴う奥地の伐採により、上流域の荒廃が起る。上流の河岸に護岸工事を施せば河水はますます集中的に流れ、洪水の出足が早くなると共に、場所によっては河床が高まり、出水時の危険が増大する。また、ダム建設によって物いわぬ動植物には致命的打撃が与えられ、渓谷の景観は傷だらけとなるがこれは単に美しくして文化的な風土の喪失であるに止まらず、観光の質的低下・水質汚濁・生活用水の不足・地下水や温泉の異常・水害最悪の場合にはダムの決壊という自然の反作用となって戻って来る。

### 高瀬渓谷に寄せる

山本 携 挙

春には唐沢岳を背景に、溪流に垂れかかるしやくなげの花を撮り、湯煙りが広がって朝もやを一層深くしたあたりに、放射状に差し込んでくる太陽の光をとらえ、夏はまた、じたたるような緑の谷合をY字形にコンボジジョンして、遙か烏帽子岳の峰をのぞかせたり秋には五段染めに綾なす紅葉の錦をふんだんにワイドに収め、カラカラと音たてて足元深く岩をかむ溪流に散って行く枯葉を追い写し冬は寒沢あたりに、ひっそりと淋しうに雪をかぶって立つ無縁の石仏に焦点を合せたり高瀬渓谷の四季は、めぐるほどに、さらに佳き自然のモチーフを与えてくれた。旅館のあるじに頼まれるままに、ホスターのレアウトまでも引受けてしまつて、中部山岳国立公園

高瀬渓谷という字句を、その写真に良く似合ったものができるまで、字体を変え配置を工夫したりしては、何度も何度もレタリングしたものだ。夏のある日の昼下り、あまりの暑さにカメラを放り出して清流に丸裸で泳ぎ、焼けつくような岩肌にもたれて、甲らを干しながらしみ入るような蟬の声に、うたた寝の一時を過ぎた日、手拭の片方に玉子でうつつか包んで沸湯するいで湯に吊し、うでで食べた友人との語らいつの時、またカメラを肩に黄昏しのびよる、あの道を瀬のあい間に河鹿の鳴く声を探すようにして歩いた日など特に懐しい想い出される。

私はかつて白沢から扇沢あたりの、汗しながら通った山道が、無惨にも切りさかれ、砕かれて、建設という名のもとに変貌したのをこの眼で見たし、一昨年は八・一の一の災害時に早速高瀬渓谷の現場に踏み入り、つぶさに変り果てた光景を撮影した。まさに前者は人為的な自然の破壊であり、後者はその自然が猛り狂った足跡であり、いづれも眼を覆いたくなるような荒涼としたたざまいだった。今宵、中部山岳国立公園、高瀬渓谷と印された、過ぎにし日写したネガのフアイルを整理しながら、おもいは次から次へとほせ続けるのである。

山紫水明を誇った我々の郷土も、大気の汚

染、水の汚濁が騒がれ、そして自然の保護が人々の口にさげばれている最中に、またまた建設の名において多くの樹木は伐採され、動物たちはそのすみかを追われ、幾多の昆虫や植物は減滅され、そこにはとつともつかぬ程大きな水量のダムが作られようという形で、建設中の大方のトラブルは補償という形で、又その多寡で片付けられてゆくであろうが、そこには金にも物にも物にも代り切れない自然の破壊の爪跡が残り、人の心の安らさが容赦なくすりへらされて行くのを覚える。いつ、どこで、誰たちが決めたのか、神秘なほど美しく、静寂だった、あの高瀬の谷の奥深くすでに植音の響きが無気味にも次第に高まりつつある今日此頃である。(写真家)

### なにをなすべきか

北沢 勝 治

この頃になって、生物の住む環境や、住み場所、生物の相互の関係や、生物同志のはたらき合いが、注目されるようになってきました。人間もその生物群集のなかで、生きていくために、この現在のはげしい変化からどれほどの影響を受けているかを、考えなければならなくなつたわけだ。

この頃になって、生物の住む環境や、住み場所、生物の相互の関係や、生物同志のはたらき合いが、注目されるようになってきました。人間もその生物群集のなかで、生きていくために、この現在のはげしい変化からどれほどの影響を受けているかを、考えなければならなくなつたわけだ。

### マルパッセの教訓

たつて世界のアーチ

一九五九年十二月二日、南フランスのマルパッセ・アーチダムが大水のためにくずれ、下流のフレジユスのまちを押し流し、死者、ゆくえ不明五百人を出した。設計者アンドレ・コインはフランスのアーチダムの最高権威者だったが、この衝激で急死した。マルパッセダムは高さ六十メートル、当時コンクリート打ちがはじまっていた黒部ダム(高さ百八十六メートル)には及びもつかない規模のものであった。関電の黒部川第四発電所建設に三千七

議をつづけた結果、設計の一部変更を行つた。こうして、コンクリートミルクが岩盤に注入され、アーチの両端には、重力式のウイングダムがとりつけられたのだ。

『実業の日本社「クロヨン」参照』

特に工業化という巨大な自然の破壊が、すべての生物の生活条件のバランスをくずしてしまつていくことに気づいたのです。そしてその変化に適応できないで死滅してしまつたものが、あまりに多いのに驚いているのです。人間の生命もまたそれと例外ではないはずで、生命にとって環境が必要である以上、その望ましい環境とはなんであるかを考えなければならぬわけです。

日本の国土計画では、昭和六十年までに、利用できる土地と水の全部を工場が使用するこ

ととなつていきます。さて、高瀬川の開発計画も日本の水力電気としては最後になるだろうといわれるほど大規模なもののようにです。

しかし、なぜ背水面積が極めて小さく、堆砂量の非常に多い高瀬川の奥ふかい地点をえらんで、この大工事がすすめられるかといえは単的にいって補償料がほとんどなくてすむからだと考えられます。つまり短年月で発電量が落ちてしまつてもペイできるわけです。

これは使い捨てということに通じます。電力という公益の名のもとに自然が開発されるにしても、それは国家独占資本が自然を先取りしてしまうことであるのはま違ひありません。もつとまじな使用の方が二十年か三十年したらあるかわからないのです(ダムの貯水量は二十年で半減します)自然破壊の実状をあまりにも多く見せつけられてきた現在、

ここでこの先取りを許すわけにはいきません。地域工ゴイズムであつても、この自然と共に生きてきた住民は、その調和を破壊されることをみすすこととはできないはずで、

汚染や破壊はなかなか元にもどすことは出来ません。それが人為的なものであるとすれば被害者にならないために強く発言しなければならぬのです。

我々の生活を守るために、これだけの環境は守られなければならないというシビル・ミニマムを市民運動として確立すべきです。



# 大町周辺の思い出

井手 貴夫

大学に入學した昭和七年の夏休みを私は初めて中綱湖畔で過した。当時は湖端館と青木旅館という二軒の宿屋がそこにあった。大町から汽車に乗りかえていった。汽車はまだ中土までしか通じていなかった。年々登山の盛んになりつつあった頃であったが、それでもまだ二台のボギー車……といってもいまの人に同じような車も知らないが、短い客車に対して今の客車のような長いのをボギー車といっただが……そのボギー車が二輛か三輛か、あとは貨車をつないで、ポツポツと小さな汽関車があちこちのように坂道を登って行ったものである。その二輛の客車から白馬登山の人たちが、おやここにこんな湖があるのかというような顔をしながら窓からのぞいて見る位のこと、ヤナバの駅に下りる人など殆んど数えるほどだった。宿の部屋で読書などしていると、ヤナバの駅を汽笛一声、ポツポツと汽関車が動き出してまもなく、湖のはしの木橋を渡る下駄の音がカタコトと響いてきたものである。中学の五年だった昭和二年に燕から大天井、常念岳、一ノ谷から上高地、徳本峠を越えて島々へと歩いたことはあったが、その後少し体を悪くして余り山歩きもせず、その夏初めて人に誘われて中綱湖へ行つたので白馬の麓とだけ漠然と考えていたのだが、ある日黒沢峠へ登って、思いがけずそこに鹿島槍の勇姿を仰ぎ見たときの大きな感銘はいまでも覚えている。宿の前に西山佐藤次といつたと思うが、背の六尺近いがしりした偉丈夫の農夫がいた。その人が山案内を兼業していたので、その案内で当時まだ中学生だったY君を連れて黒沢峠から道のない沢を鹿島川へ下り、渡渉して冷沢から鹿島へ登った。冷

の小屋へ泊り、翌朝頂上まで往復して、さらに爺が岳を越えて種池小屋どまり、その翌日は針ノ木峠を南に下って、南沢との出合いから南沢をつめて鳥帽子小屋へとまり、そこから高瀬川へ下りて、木崎へ出、ヤナバへもどった。鳥帽子小屋から高瀬川へ下りたところに葉の綺麗に揃った美しい木の林があった。幹の太さはそれほど太くなかったように記憶している。せいぜい直径三十cm位だったろうか。それが桂の木だと教えられて、何という美しい木かと思つたことをよく覚えていて、あの桂の林はいまどうなっているだろうか。その後数年毎年夏を中綱湖畔で過した。湖端館が火事で焼けて、それから行かなくなつた。しかし、その後すでに教師をしていたがよく秋の終りに後立山へ行つた。十月の十七日が昔は祭日で、十八日が私の誕生日なので休みを作つて、白馬や鹿島槍へ登つた。当時は夜十時頃に新宿を發つて、朝四時頃松本へ着く。大町へ着くのは六時頃だったろうそれから鹿島川にそつて歩き出すのである。山ですごした帰りはまた大町を夜発つて、早朝新宿に着く。当時吉祥寺に住んでいたの途中中で乗りかえて帰宅、朝食をすませるとすぐ学校へ行つて授業をするのだが、眠くてたまらなかつた。それでも、十月の十七日前後と、十一月三日の休みには必ず山へ出かけた。十一月三日前後にはよく一夜雨が降る。山はもちろん新雪である。麓の紅葉と上の新雪とがたまらない魅力であった。大低は人夫をつれて、よく一人で رفتつた。白馬へはスキでも二、三度行つた。鹿島の里の狩野さんの御宅には三度位ご厄介になつたことがある。いつも奥さんがそばを打つて下さつて、それ

がおいしくて楽しみだった。あれはいつ頃だったか、もう昭和十六年頃、三月に不図思いついてヤナバへ行つた。湖端館はとづくになくなつて、青木旅館にとまつたが、翌朝よく晴れたので、スキーで黒沢峠に登つた。峠の上に以前はぶなの大木がうっそうとしていたのに峠の南の上方の尾根はすっかり伐採されて、そこへ立つと鹿島川と鹿島の里が、木一本ない真白な斜面の下に見える。そこを滑り下りるのはなだれでも起しそうな気がして樹木の茂っている黒沢の沢ぞいに狭い谷の中を苦勞して下りた。やがて小雪が降り出した中を狩野さんのお宅に着いた。丁度ご主人が留守だったがやがて帰つてこられて、スキーのシュプールがついているので、だからと思つたらあなたでしたか、それにしても今頃よく来て下さつた、まあごゆっくり、といつて出て行かれたと思うと、暫くしてイワナを五六尾網を打つてとつてこられた。その夜、一人、こたつにあたりながら、カクネ里のなだれの遭難記を借りて読みふけたことを覚えてる。翌日はまた黒沢を越えてヤナバへもどつてきた。

戦争が激しくなり、山へも行けなくなつた列車の切符が自由には買えなくなつた。戦後にはまた身辺の不幸もあつて、暗い年月が続いた。昭和二十五年十月に北海道へ来てからは、信州にもご無沙汰をしていた。それでも昭和三十三年頃、京都で学会のあつた帰りに、信州大学の望月市恵さんになつたので、山岳部の学生四人ほどに助けて貰つて、また鹿島川をさかのぼつた。十一月一日・二日・三日と鹿島から五竜を経て、遠見尾根を下つた。狩野さんの所にはこの時は立ちよつて挨拶だけして別れた。五竜の小屋へ着いてから朝まで吹雪かれた。そのあとまたじきに晴れて、腰までのラッセルになつたが、楽しい山歩きだった。その後の大町は知らない。昨年まで大町の営林署長をしていた馬淵氏とよく、彼が札幌営林局時代に、自然保護のことでよく一緒に歩いたので、彼が大町にいる間にぜひ訪ね

たかつたのだが、果せなかつた。今の大町はともかくひどい変りようだろう。私の知つている大町は板ぶきの低い家並みが両側に並んだ、いかにも淋しい山の町だった。桑畑の多かつたことを覚えてる。馬蹄屋で、火をおこして、馬の脚に蹄鉄を打ちつけているのを見たことがあつた。駅前をのぞいては、余り店屋らしいものが目につかなかつたような気がする。山へ行くために朝早く着くか、夕方山から降りて来て、電車にまにあわせようと急いで通りすぎたせいか、余り細いことを覚えていない。しかし、大町は私たちにはいつも山の町だった。それなりに、だから懐しい町だった。町から眺める野口五郎、連華、爺鹿島、あの奥深い大きな眺めは他の土地では見られない。それは山旅への思いをかき立てずにはいかなかった。今はどうだろう。乗物で簡単に黒部ダムから立山へ行けるらしい。出来ているからには、それをも一度は利用してみたい気がする。しかし、大町の駅に立つて山々を眺めながら、リュックを背負つて、さて、高瀬川へ、鹿島川へと入るあの気持ち、何といつてもやはり若々しく、新鮮で、忘れがたいことである。

(日本山岳会会員、北大教授)  
(北海道自然保護協合理事長)

▼本紙購読料値上げ  
印刷費、郵便料の値上りのため、11月納入分から次のように購読料を改訂します。  
年額 四〇〇円。

▼お願い「山と博物館」の購読者をつつておられます。年間四〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可)

山と博物館 第16巻 第9号  
一九七一年九月二十五日発行  
発行所 長野県大町市TEL②〇二一  
印刷所 大町市下仲町 山岳博物館  
大糸タイムス印刷部  
定価 年額 三〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野二二、二九三)